

山下文雄（久留米大学教授）監訳

発達の視点からみた障害児の療育

第2巻 障害児の心理的、社会的問題と教育

平井 久（上智大学教授）

この第2巻「障害児の心理的、社会的問題と教育」は、編者 Theodor Hellbrügge 氏の主宰する ミュンヘン小児センターが、各種の障害児を受け入れる時、診断についてはこのように考え、又こんな準備がなされ、治療についてもこのように考え、またこんなことが可能であることを示した本である。ただ一見しただけでも、大変広大な構想の下に、診断と治療が行われていることには敬服するものがある。

背景になっている考え方は、編者の「社会小児科学」であり、それと密接に関係した施策として発達の視点に基づいた「発達リハビリテーション」があることはいうまでもない。この障害児の発達に関する診断・治療の方法論的根底には、次の3点が認められる。その第一には行動学的観察法（「生態学的ではない*」）、第二に、神経運動学的方法、第三として、モンテリリ治療教育法がある。

第一の基礎は、Lorenz, K. や

* [筆者・註] 生態学=Ecology; 行動学=Ethology.

Timbergen, N. に見られるような動物の行動観察から派生したものであるが、今やヨーロッパ（特に英・独）では、乳児・幼児の詳細な行動観察法となり、対象の行動がどんな意味をもっているかを客観的に捉えようとする有力な方法論となっている。この本では、勿論、従来からの諸検査法その他が含まれているが、行動学的方法がその診断の中心的位置にすえられているように見受けられる。

第二の基礎は、現在、日本では「ちえ遅れ」の早期治療法として著名な Bobath-Vojta の感覚運動訓練法であり、この方法は今や種々の心身障害児の治療に有益な示唆を与え、早期に発見された障害への有力な方法となっている。さらに、この他の言語習得訓練には米国で普及している行動形成法が活用されていることは興味のあることである。

第三の方法論的基礎としては、モンテリリ治療教育法がある。伝統的なモンテリリ法や教具に加えて、「強化」や「スモール・ステップ」などの米国の学習理論的手法が

含められていることは、各種の障害児をよく知っている編者の卓見と思いやりの表われを物語っている（ちえ遅れなどには、モンテリリ法の内発的動機だけでは不十分で、連合的学習論の外発的動機が加わって力を発揮するからである）。

障害児研究の最近の傾向として、障害児における両親の意識の問題や家族の関係がしばしば取りあげられているが、この本においても最後の部分に、このような課題が扱われている。しかも、個々の問題に対してどのように対処すべきかの指導までも示され、コミュニティの各教育機関や病院がこれにどう関わってゆくべきかについて示唆が与えられている点には注目に値するものがある。

紙面の関係からか、診断や治療教育に関する内容もまだ骨組みの域を出ていない。ミュンヘンのセンターでの具体的な症例を含めた編者による増補版が出版されることを心より期待したいと思う。

この本の中の各論文の訳はいずれも読みやすく、編者・筆者の意思をよく伝えているものである。養護教員、幼児教育家、ソーシャル・ケースワーカー、小児科の看護婦、臨床心理学・発達心理学の専門家に是非一読をおすすめしたいと思う

(B5, 頁200, 1983, ¥5,600,
〒300, 医学書院 刊)